（７）私の会社時代の語学体験　　津田　眞臣

電気工学科を卒業し、総合商社に入社した数少ない人間の一人として約 50 年間の外国語の体験談のごく一部をご披露したいと思い、この企画に参加することにしました。

１）入社当時の思い出 (その 1)

入社年次の５月初旬、1ヶ月の研修が過ぎて配属された貿易関係の某部課で、当時の上司より「津田君、外人が来たから〇〇工場までつれて行ってくれ」との命令があり、つれて行くことになった。

つれて行くぐらい言葉が出来なくても何とかなると思っていたら、工場に着いた途端 「津田さん、外人さんの隣に座ってこの会議の通訳をお願いします」 と言われ引くに引けず始めたものの、格好がつかずに終わった次第。

帰社後、命令した上司に対し、「つれて行けと言われたので、つれて行ったら通訳までやらされた。これは話が違う」と申し出たところ、「津田君、よくそれで当社に入って来たね」と言われてしまった。

入社前の会社の当時の人事部長との非公式面談では、「我々は君達の語学力に期待しているのではない。会社が必要としている技術力に期待しているのであり、語学の研修など会社側で色々準備しているので、心配無用」という確約を得ていたので随分話が違うなというのが第一印象。

２) 入社当時の思い出（その２）

上記のようなことがあって暫くして、英文による手紙を書くことになった。ない知恵を絞って原稿を書き、同期入社の女子社員にタイプを依頼したところ、暫く読んで言われたことは。「津田さん、次回から日本語で書いて来てよ」。要は、私の書いた英文では何が言いたいのか判らんということであった。

３）その外にも色々な失敗をして来たが、それ等は省略するとして、それらを会社の独身寮の同輩にまとめて相談したところ、彼曰く、「外国語というのは“なれ”でもあるので、この個室内では英語以外は使わないようにしよう」という提案があった。ちなみにその頃は、二人部屋が一般的であった。

向こうは簡単、というのは、彼は東京外大の英米科出身しかも ESS のキャップテン、ところが当方にとっては大変なことであった。

それでも彼の言うことに賛同できたので、実行することになった。先ず英語で覚えたのは「廊下に出て話を聞いてくれ」に始まり、約半年間続けることが出来た。

ところが、その年末寮で開かれたクリスマスパーティーの時、男子寮生の

最低二倍は来ていた多くの女子社員が我々の部屋にも入って来て、この神聖な道場はつぶされたということになった。

４）インドネシアでの経験

入社数年後突然インドネシアのジャカルタへの転勤が決まった。他の東南アジアへの出張経験はかなりあったが、インドネシア行きは初体験。周りの経験者に聞いて見たところ「インドネシア語など簡単で、赴任してから覚えても何ら問題ない」と言われそれを信じて赴任した。

ところが、着任の翌日一人で独身寮で朝飯を食べに行ったところ、全く言葉が通じない。卵、パン、バターなどなど全部現地語でないとだめであった。これは話が違うといっても後の祭り。覚えるしかないと思い数日後から猛勉強。

約３ヵ月後には並の駐在員に追いついたこともあった。

5) ナイジェリアでの経験

ナイジェリアは、アフリカ大陸の中央部にある英語圏の国である。アルジェリアが｛地の果て｝という歌もあったが、私に言わせれば、ナイジェリアはそんな生易しいもののではない。

先ずもって、彼らの日常しゃべっている「英語」を理解するのに相当の時間を要する。

よく聞いていると、単語は確かに英語のようだが、発音が聞きなれた英語とは違い、最初の３ヶ月位は相手の言っていることが殆ど理解できなかった。

ひとつの例として、Yes と No の使い方が全く日本語と同じで、英語の文法とは完全に違うのである。それ以来この国では、「否定疑問詞」は一切使わないことで対処することにした。

6) スペイン語

これは難しい言語である。 動詞の活用には不規則が多く，ひとつの動詞が24通りにも活用する。頑張って取り組んだが，たいした物にならずじまいに終わった。

ここまで来て気付いたことは、残りのページが殆どないことです。こういう企画を提案された幹事の皆様には多大の謝意を表明すると共に，次回もしこのような企画をされる時には、もっとページ数を与えて頂き、色々なことも自由に書かせていただく機会をあたえて頂ければ幸甚です。 終